【特集：忘却されざる記憶—60年後からみるマラヤ建国】

記憶がつなぐ社会の亀裂と家族の離散

映画『不即不離—マラヤ共産党員だった祖父の思い出』の制作と上映をめぐる

ラウ・ケクフアット (編集委員会訳)

今回見ていただいたのは私のドキュメンタリー作品である『不即不離』ですが、私はドキュメンタリー映画だけでなくフィクションの映画も作っています。私の仕事をまとめて言うと、映像を使ってストーリーを伝えることということになります。それが過去に起こったことだとしても、映像を通じて、見ている人を当時の現場に連れていくというのが私の仕事です。『不即不離』も、そこで描かれている独立前の出来事は私が実際に経験したことではありませんが、映像化することを通じて、射殺された祖父の経験をもう一度繰り返して私の経験として理解するということになります。

祖父が殺されたとき、イギリス軍の兵士は祖父の遺体を家の裏山に運んで置いてきたそうです。私たちが祖父の遺体に対してどのような行動をとるのかを見て、祖父と私たちが家族かどうかを確認したかったのだらうと聞きました。もし家族の誰かが祖父の遺体に何かの行動をとれば、私たちが祖父の家族だと確認されて、家族のほかのメンバーもイギリス軍に連行されていたかもしれません。

イギリス軍は祖父の遺体を私の家まで運んできて、遺体を祖母に見せたのですが、祖母はそれを自分の夫だと認めませんでした。それ以来、祖母は死ぬまで祖父について語りがありませんでした。祖母は本当に強い人だったと思います。もしそのとき祖母が祖父の遺体を見て泣いたり、これは私の夫だと言ったりしていたら、おそらく私も含めて私の家族は今ごろ存在していなかったかもしれませんし、存在したとしても、中国に送還されていて、私は中国国籍をもった中国本土の中国人だったかもしれません。

私の家族のような存在はマレーシアではけっして特別な例ではなく、同じような痛みや離散を経験した家族はたくさんいます。

1957年にマラヤ連邦が独立した際に、独立記念式典が行われたスタジアムで、マラヤ連邦の初代首相が「ムルデカ」と高らかに叫びました。これはマレー語で「独立」という意味です。ただし、ムルデカは古代インドの言葉に由来する言葉で、国の独立という狭い意味だけではありませんでした。ムルデカという言葉は、当初は個人的な自由に関するものと捉えられていて、努力を通じて自由を勝ちとった人のことをムルデカと表現していました。したがって、ムルデカという言葉の本来の意味は、「個人の自由を追求することに

よって国の独立を実現する」ということなのだと思います。

マレーシアの前身であるマラヤ連邦は1957年に独立を果たしましたが、私たちマレーシアの国民はその歴史について本当に何も知りません。独立には二つの側面があります。国の独立と個人の独立です。独立した国の国民だからといって必ずしも独立した個人であるとは限らないのではないかと思います。イギリスからの独立を果たしたあとも、マラヤは植民地的な思考の影響を受けており、独立した考えをもつには至っていませんでした。

また、歴史にも二つの側面があると思います。歴史は、必ずしも上から下に与えられる一方的なものではなく、複数のもの、多様なものと同じように進んでいくことでできていくものではないかと思います。

この映画で私がインタビューしたのはすべてマラヤ共産党の元党员です。ただし、すべて現場で戦っていた兵士で、けっして指導者層ではありません。この作品を撮るにあたって、指導者も含めたマラヤ共産党の歴史を正面から捉えてはどうかという意見もありましたが、私はそうではなく、前線で戦った兵士一人ひとりの個人的な側面を撮りたいと思いました。

私の映画では、女性の元マラヤ共産党员にも多くインタビューしています。彼女たちが戦闘に加わったのは、けっして共産党の理想に燃えてということではありませんでした。私がインタビューした女性の元マラヤ共産党员たちは、なぜマラヤ共産党に入ったのかと尋ねられて、個人的な理由を挙げる人もたくさんいました。女性の権利があまり認められていなかった時代に、女性の権利を得たい、たとえば親が決めた相手との結婚ではなく自由な恋愛による結婚をしたい、そのような考えからマラヤ共産党に参加した人も多かったようです。

別の個人的な理由として、搾取される階級から抜け出したいという願いもあったようです。そのような人たちの多くは読み書きができず、教育を受けたいと考えていました。マラヤ共産党は部隊に入った人に教育を与えたので、それに憧れてマラヤ共産党に入ったそうです。当時の人たちにとって、文字で自分の名前を書けることはすばらしいことでした。このような人たちは本当に心が美しい人だと思います。自分の人生の自由を得ようとしてマラヤ共産党に入ったのであって、けっして左派や右派ということで入ったものではありません。

また、映像に関わる者として、私は時間がたいへん重要な要素だと思っています。時間は、日常的な感覚で捉えると一面的で顕在的なものですが、私の見方では、時間というのは人の内側にあるもので、それぞれの時間が層のように重なっていき、過去の時間が私の時間のなかにもあって層をなしているというようなものだと思います。今日私たちが感じていることも、未来の人から見れば歴史になるかもしれません。そのため、過去の人たちがどのように生きてきたかを記録することはとても重要なことです。

今回はドキュメンタリーを撮りましたが、次はフィクションの映画を撮ろうと思っています。

ます。主人公は私の祖母とその子、つまり私の父です。舞台は1950年代のマラヤで、母親と子どもだけで父親のいない家庭がどのように生活を乗り越えてきたかを描きたいと思っています。

以下では、『不即不離』に関していただいた感想や質問を参考にして、この映画の制作や公開の背景や状況についてお話しします。

I インタビューの信ぴょう性をどのように確保するか

歴史は学者が記録を跡付けて考察して、確認する作業を経て正しいものとして記録に残されていくものです。それに対して、記憶は個人的な感情の部分が多く織り込まれて、さらにその記憶が個人の環境に影響を受けて、真実について若干の食い違いが生み出されることがあります。

記憶が重要ではないと言っているわけではありません。たとえば、小説執筆では記憶の部分に頼ることで創作活動が行われます。私が言いたいのは、記憶とは一人ひとりが生きていくなかでもたらす重みだということです。

私がさまざまなインタビューを通して感じたのは、人が苦しむ度合いはその人の記憶のあり方に影響を与えるということです。たとえば、作家の黄錦樹の作品にも、語り手の「私」が亡霊に取り憑かれたような語り口をするものがあり、家族として深い苦しみを経験したあとにその苦しみを亡霊の口を通して語るという方法が見られます。

あるいは、自分が深い苦しみを経験したとき、創作作品のなかで歪曲したかたちで経験を表現することがあります。亡霊に取り憑かれたという程度ではないとしても、自分の受けた苦しみを拡張させて、真実とは違うかたちで表現することがあります。

私はこの映画を制作する過程でたくさんの方にインタビューをしました。インタビューしているときには、明らかに嘘をついているとか、真実と異なることを言って否定しているとか、真実を隠しているということが、目を見て話を聞いてわかる場面もけっこうありました。ただし、私は、その人があまりにも苦しい経験をしたあまり、それより大きなもので覆い隠したいという感情をもってしまうことを理解し、尊重しています。

映画にもありましたが、女性が自分の子どもを養子に出さざるを得ないという話は、たくさん交流したなかで最終的に心を開いて語ってくれた部分です。最初にお会いしたときにはけっしてそういった話をせず、そんなことは何もなかったような顔をして別のことを話してくれた人でした。

II 台湾と中国大陸でどのように受け入れられたか

台湾は国民党政府で、歴史的に共産党と対立して台湾に移ったという背景があります。

しかし、台湾人にとって家族の離散は同じ中国人・華人として理解してもらえるテーマで、とくに年輩の方には同じような経験をした方も多くて、この映画に感動したと受け止められています。

中国国内では、「地下で」と言ったらいいのでしょうか、北京で2度ほどこっそりと『不即不離』を上映したことがあります。中国政府の立場としては、学校で教える際にはマラヤ共産党は「抗日戦争に参加した」としか語られません。そのあとマラヤ共産党はイギリスによる支配に抵抗するわけで、その過程で実際には中国共産党と関係がありましたが、公式の立場としては、中国政府は東南アジアの共産党との関係は認めないという立場をとっているためです。

北京では、マラヤ共産党の元党员や、かつてマラヤ共産党を支援していた人たちにも、この作品を見てもらいました。「たいへん感動した」と言ってもらいましたし、この作品を作ったことに感謝の気持ちも述べてもらいました。この作品にもあるように、マラヤが独立するまでは、彼らが夢見ていた祖国とは中国でした。歴史の過程でマラヤ共産党と中国国内の関係が変わってきたことによって、「あなたにとっての祖国は共産党の中国か国民党の中国か」と問われることになってしまい、祖国とはいったい何かという考え方が変わってきてしまいました。

当時、実際のこととして社会が分裂することによる家族の離散という状況がありました。それは、この作品で描かれているマラヤの人だけでなく、東南アジアにいる人も、中国大陸にいる人も、台湾にいる人も関わる問題でした。そのため、政治的な立場にかかわらず、台湾でも中国大陸でもこの作品は同じように受け入れられていると思います。中国でも台湾でも、離散を経験した人たちには同じ思いがあるためです。

Ⅲ マラヤ共産党メンバーが微笑んでいるのはなぜか

この映画で私がインタビューをした人たちは、みんな穏やかな顔で、笑顔を浮かべながら当時のことを語っています。ただし、実際にはマレーシアの国内を含めて、マラヤ共産党に対しては残酷であるというイメージがあります。

それは、非常事態宣言が出たあとのマラヤのメディアが基本的にイギリスに管理されていて、マラヤ共産党の残酷なイメージを伝える報道が多かったためです。

1970年代から1980年代になって、マラヤ共産党にとって戦況が苦しくなると、マラヤ共産党の内部でさまざまな残虐な行為が出てきたことがありました。戦闘が苦しくなって、自分たちの望む革命に希望がなかなか見出せなくなったところに、マラヤ共産党の内部で路線対立が起こって、互いを傷つけあい、無実の一般の人が犠牲になることもありました。

マラヤ共産党の路線対立が起こったのは、中国の文化大革命の影響もありました。マラ

マラヤ共産党は中国共産党の政治部の指示を受けており、党員どうして粛清しあうような指示が出たこともありました。私がインタビューした人から、粛清のために自分の妻を殺した人の話を聞いたこともあります。そのインタビューの後、私はその素材はこの作品では使わないと決めました。左派の闘争の背景やマラヤ共産党の内部対立はとても複雑で、どのように表現するかが難しいからです。もしそのインタビューを使うのなら別の作品としてきちんと描かなければいけないと考えて、この作品では使わないことにしました。

IV この作品を制作する上でどのような障害があったか

この作品は私にとって初めてマラヤ共産党をテーマにした作品です。マラヤ共産党はマレーシア国内ではタブーですが、この作品を撮るにあたって一番の障害だったのは、政府や国ではなく、むしろ自分の家族でした。父も母も、私がこのような作品を撮ることに反対でした。

この映画を撮りたいと言ったとき、父や母は少し恐れました。祖父がマラヤ共産党員だったことを世に知られることを恐れたためです。そのため、私がこの作品を撮りたいと言うと、父は最初は強く反対しました。しかしある出来事がきっかけになって父の考えが変わりました。

それは、映画のなかでも描かれていますが、父親の姉、つまり私の伯母が、思い出話として、小さいころに父親、つまり祖父が毎日家に帰ってきて、お風呂場できょうだいたちの体を洗ってくれたと話してくれたことがありました。

父や伯母たちは、よそでも祖父のことは話せませんでしたし、家族のなかでも、きょうだいどうしても、祖母とのあいだでも、祖父は存在しなかったことになっていて、語られていませんでした。映画の冒頭にもあったように、父は「家に父がいないのは当たり前だった」と言っていました。しかし、伯母が「子どものころには毎日帰ってきてくれて、お風呂場で体を洗ってくれた」と話してくれた映像を父に見せると、父は、本当に体が動かなくなるぐらい驚きました。父には祖父の記憶がなかったので、自分には父親がいないとずっと思ってきたのですが、自分が知らなかった祖父の話を聞いて、突然父親がやってきたような感覚にとらわれたのだと思います。

伯母の話をきっかけにして父の態度が変わりました。それまではこの映画を撮ることに反対でしたが、「お前が撮りたいなら撮りなさい」と支持する立場にかわったのです。

V なぜマレーシア国内で上映が許されないのか

なぜマレーシアの国内でこの作品が上映できないかについては、二つの理由があります。この映画でマラヤ共産党が戦っているのは独立を求めてのものです。ただし、私たちがマ

レーシアの学校で学んだ教科書には、マレーシアには独立戦争はあったと書かれていません。マレーシアの独立はイギリスとの平和的な交渉によって得られたという立場で書かれています。そのため、マラヤ共産党が独立のために戦った姿を描くことは、マレーシアの国にとって脅威に感じることがあるのだと思います。

近年、マレーシアでは三つの民族の言語を合わせて載せるメディアが出てきています。私の映画は、マレー人コミュニティではタブーですが、華人コミュニティで見ってもらうことに限っては問題がないと思います。ただし、英語の字幕を付けるだけでなく、マレー人にも見ってもらうことを考えてマレー語の字幕も付けようと思ったのですが、それについては政府から妨げるような動きがありました。

もう1点、マレーシアのメディアでよく報じられてきた、あるいはこれまでマレーシアで語られてきたことは、マラヤ共産党は華人だけの組織だったということです。マラヤ共産党は華人のテロリスト集団だったという立場です。しかし、この作品を見ていただければわかるように、マラヤ共産党員にはマレー人もいました。華人と一緒に戦っていましたし、映画の最後の場面にあったのと同じように、華人もマレー人もみんな手をつないで楽しそうにしていたということもあります。このような場面があることも現在のマレーシア政府にとって問題だと思われたのかもしれませんが。

この作品の最後に、タイとの国境地域にかつてのマラヤ共産党員が集まる場面があります。タイとの国境でマレー人を迎えて、抱き合っ、いっしょに踊るという場面です。私も、撮影する立場ながら、彼らの姿を見てたいへん感動したものでした。いったいこれは何が起こっているんだと思いました。インド人もマレー人も華人も一緒になって、楽しく、仲良くしている姿に驚きました。

民族主義的なテロリストだと見られていたマラヤ共産党の内部で、実際には華人もインド人もマレー人も仲良くやっていたことに、これはいったい何なのだろうかと思いました。そして、現在の若者である私に照らして、1957年のマラヤ連邦の独立以降、私たちが暮らしている現在のマレーシア社会で、当時のマラヤ共産党ほど華人、インド人、マレー人に緊密な関係があるのか、ないのではないかという問題意識を持ちました。

私はアシスタントと二人で撮影したのですが、彼らが一緒に踊っている様子を見て、私もアシスタントもたいへん驚きました。そして、これを今のマレーシアの人たちに見てもらえれば、私を感じたような驚きや、私がいま述べたような問題意識を共有してもらえるのではないかと思って、この場面を使うことにしました。

VI タイトルに込められた意図は何か

「不即不離」というタイトルは、もともと仏教の経典からとった言葉です。完全に死んではない、つまり、この世にもいないけれどあの世にもいないという状態が「不即不離」

のもとの意味です。

「不即不離」という中国語は「つかず離れず」という意味で、これはまさに祖父の存在を表している言葉だと思いました。私の家庭のなかで、祖父の存在は、この50、60年間、存在しないに等しいというか、語られていなかったのですが、まったく存在していなかったというわけではありません。たとえば、家には祖父が使っていた椅子がいまでも置いてあります。なぜこの椅子がそこに置いてあるのかという理由は誰も教えてくれませんでした。が、そのように何らかのかたちで祖父が存在し続けていたと言えます。

父たちは不在だった祖父について直接語ることはありませんでしたが、語る以外の方法で祖父の姿を見ていたようです。たとえば夢で見ることもあって、伯母もそのように言っていましたし、映画でも出てきましたが、幽霊になっていると思うとか、霊魂に出会ったと思うとか、そのような接し方をしてきました。

夢で見るとか霊魂に出会うとかいうことは、私はけっして迷信ではないと思います。いないけれどいる人、歴史的な背景か何か事情があって存在が肯定されない人に、夢で見たり霊魂として出会ったり、あるいは心に触れたりとかたちで接することは、あり得ることだと思います。仏教の経典からとった「不即不離」というタイトルを選んだのはそのようなことを考えたためです。

VII 最近、マラヤ共産党に関心が高まっているのはなぜか

最近のマレーシアやシンガポールでは、芸術や文学の分野で活躍する若い世代がマラヤ共産党に対して興味をもつようになってきました。マラヤ共産党をテーマにした劇も上演されてきています。この変化の背景として、まず、伝統的にマレーシアのメディアは保守的でしたが、それが最近になって若干変わってきたことがあります。何よりもインターネットが登場したことで、若者たちを含めてみんながさまざまな異なる情報に触れられるようになりました。

また、東南アジアでもさまざまな政治的な動乱を経て、公的な権威への国民の信頼が低くなったことがあると思います。以前は政府やマスメディアに教えられたことだけを疑いもなく信じてきたのですが、いまではそれを疑うようになり、何かを取り戻さなければいけないと感じるようになってきました。マラヤ共産党の戦争の歴史は1949年から1989年で、これだけ長い期間にわたる歴史をすべて捨て去ることはできず、これを取り戻さなければならないと考える人がいるのではないのでしょうか。

私自身は、共産党に興味があったためにこの作品を撮ったのではなくて、祖父がたまたまマラヤ共産党員だったということでこのテーマの作品を撮りました。マレー人のなかには、金銭的な事情もあったのですが、自分の祖父がイギリスの傭兵のようなかたちでイギリス側について、私の祖父のような共産党員や別の立場の人と戦ったという背景をも

つ人たちもいます。そのような背景をもつ監督がそれを撮って、その祖父たちがどうなったのか、家庭に与えた影響は何だったのかというような作品が出てこないかなと期待しています。そのような映画が出てきて初めて、私の映画や別の背景をもつ人たちの映画も含めて、それがマレーシアの歴史としてまとまるのではないかと思います。